

「～京の伝統文化と水神さまの源流を辿る～」

講演者: 吉田重光 技術士(上下水道部門)

前京都市上下水道局技術長 一般社団法人日本ダクタイル鉄管協会顧問

1. はじめに

本年は、現存最古の古典歴史書「古事記」撰上(712)から千三百周年にあたる。日吉神社(京都府)宮司の立場でもあり、古来神話伝説を始めとする歴史的意味合い(天地神祇、瑞穂の国、仏教伝来、水神さま伝説など)や伝統文化の継承、京の水文化について考察した。

2. 国づくりと平安京・遣隋使 遣唐使など

日本の国づくりは紀元3世紀以降、古墳時代に倭の国による建国から始まり、4～7世紀に大陸と往来した渡来人が養蚕、鍛冶、醸造などの技術文化を持ち込んだことが建国の礎になったといわれている。歴史を遡れば遣隋使・遣唐使(607～894)が、日本の国づくりに大きく貢献。大化の改新(645)に始まり、難波宮 653(大阪市)、飛鳥河辺行宮 653(明日香村)、近江大津宮 667(大津市)、飛鳥浄御原宮 673(明日香村)、藤原京 694(橿原市)、大宝律令制定 701、平城京 710(奈良市)、恭仁宮 741(木津川市)、紫香楽宮 745・4ヶ月(甲賀市)、平城京復都 745、長岡京 784(長岡京市)、平安遷都 794(京都市)へと変遷。戦乱の世を経て江戸幕末を迎え、慶応3年(1868)徳川慶喜の大政奉還、王政復古の号令、慶応4年(1869)5月戊辰の役終わり、9月東京奠都(遷都)明治改元。平安京は、実に1,075年に亘り栄華を極めた。

3. 京の水文化について

京都の水文化は、恵みの水、怖い水と言われ、あばれ川と呼ばれた鴨川の洪水歴史と深く関わっており、京都周辺は平安京造営以前は湿地帯が多く、人口河川が整備され都が造られた。江戸幕末から明治維新の文明開化、水系感染症の蔓延など、いつの時代でも、先人たちは水と深く関わり、知恵と工夫を凝らしながら都を守ってきた。京の伝統文化には、大堰川や高瀬川及び淀川水運での材木、米、薪炭など輸送による商業繁栄も深く関わっている。

4. 京の伝統文化・水神さまの源流について

京の伝統文化として①京都三大祭(葵祭、祇園祭、時代祭)②京都三大奇祭(今宮やすらい祭、太秦牛祭、鞍馬火祭)③京都三大火祭(五山送り火祭、嵯峨お松明祭、鞍馬火祭)が有名。水に関するものとして貴船神社の①雨乞い祭②貴船祭③水祭④御火焚祭などが有り、水と非常に関わりが深い。水神さまとして、古代中国では、龍は想像上の霊獣、日本では水神の化身と言われ、大地が旱魃となれば淵から出現して昇天し、時には暴れて洪水を起こすので「水の神さま」とされた。

京の地下水源泉と言われる貴船神社では、高い所から水を湧き出す「高竈神」(たかおかみのかみ)が祈雨を、また谷底から湧き出す「闇竈神」(くらおかみのかみ)が祈晴を司る水神といわれている。この「竈」の字は、龍神信仰を表し雨冠に、祭壇の供物「口口口」と、龍を合成した文字となっている。このように現代科学技術の世界にあっても、伝統文化は脈々と生き続け、精神面での人々の支えとなっている。

5. むすび

京都には、神社仏閣が多く存在し、伝統文化の根底をなしている。又、地域社会や集団内で広くお祭りが執り行われ伝統文化が継承されている。また、人間の営みと生み出された成果全てが伝統文化である。昨今、パワー・スポットとして注目されており、お参りすると何らかの力をもらえるという「心の拠り所」といわれている。長年、京の水道に携わり蛇口の向こう側は知り尽くしたが、正直なところ平安京の向こうに何があったのか気に留めなかった。このたび水神さまの歴史を辿ってみて、改めて温故知新と伝統文化の継承の大切さを痛感した。

～京の伝統文化と水神さまの源流を辿る～

講演者：吉田重光 技術士（上下水道部門） 前京都市上下水道局技術長
日吉神社（京都府）宮司 一般社団法人日本ダクタイル鉄管協会顧問

1. 国づくり

我が国の国づくりを遡ると縄文晩期（BC900頃）稲作が北九州に伝来。3世紀前半頃、邪馬台国女王卑弥呼が倭人の30カ国ほどの部落国家を統属、3世紀後半に倭の国づくりが始る。4世紀末（391）朝鮮半島百済が新羅・高句麗の圧迫を受け我が国に援軍要請あり派兵交戦・明治17年（1884）発見の「高句麗好太王の碑」で実証。5世紀になると南朝の宋・齊・梁などと国交を開き、ヤマト王権は貴族豪族（氏族）により急速に発展。6世紀初頭に継体天皇（第26代即位507）が「磐余玉穗宮（いわれたまほのみや）526（奈良県）に都を置く。このころヤマト朝廷と百済とは同盟関係を結び人的交流（渡来人往来）・文化的交流が活発化。6世紀中頃、欽明天皇の時代に百済第26代国王・聖王（ソンワン523～554）によってヤマトに仏教伝来（538・一説552）多数の僧侶渡来。任那（みまな）連合国：任那日本府が滅亡（562）。6世紀末（596）聖徳太子が推古女帝の摂政。大化の改新（645）、難波宮653（大阪市）、飛鳥河辺行宮653（明日香村）、近江大津宮667（大津市）、飛鳥浄御原宮673（明日香村）、藤原京694（橿原市）、大宝律令制定701（明治初年まで存続）、平城京710（奈良市）、恭仁宮741（木津川市）、紫香楽宮745・4ヶ月（甲賀市）、平城京に復都745、長岡京784（長岡京市）、平安遷都794（京都市）、慶応3年（1868）徳川慶喜の大政奉還、王政復古の大神令、慶応4年（1869）5月戊辰の役が終り、同年9月東京奠都（遷都）明治に改元、1,075年間栄華を極めた。

2. 平安京づくり

4世紀末以降、我が国に各地から多数の渡来人が帰化し産業・経済は飛躍的に発展。5世紀頃、嵯峨野周辺に新羅から秦始皇帝（BC221～BC206）の子孫秦氏（はたうじ）一族が移住し、優れた水工技術で葛野井堰（桂川）や農地開発等で経済的効果を発揮し、長岡京と平安京造営に大きく貢献。延暦13年（794）、桓武天皇の遷都詔「山河襟帯、自然作城：山々が周囲を襟のように取り囲み、河川が帯のように流れる自然の要塞の地であり、都をおく地の条件に適している」。風水思想・四神相応により、四神とはキトラ古墳で描かれているように東に流水があつて青龍、南に窪地があつて朱雀、西に大道が延びて白虎、北には丘陵が広がり玄武の神が鎮まり、夫々にツボがあつて、そこから大地の旺盛なエネルギー（気）が湧き起こるとされた。平安京は、平城京と同じ唐国長安城をモデルとした都城（とじょう）形式。京城の規模は、平城京より更に大きく東西約4.5km、南北約5.3kmで碁盤目のような道路が南北に大路13本、小路20本の計33本。東西に大路13本、小路26本の計39本を配置。京城は約120m四方の町に区画する計画。前述の「玄武」とされる船岡山を基点とした南北基軸の北端に大内裏・大極殿を設けた。南北中央の朱雀（すざく）大路は幅約84m、宮城に続く道路幅は約30m、小路は約12mもったという。北端に平安宮が設けられ朝堂院、豊楽院などの中枢官司が配された。造営にあたっては葛野川（桂川）などの水運で、北山や丹波国の材木、長岡宮の解体木材等が運搬された。しかし右京は、葛野川などの洪水や湿地帯のため9世紀以降になっても宅地化が一向に進まず、10世紀になると荒廃化、農地転用が進むなど律令体制が形骸化したという。

3. 遣隋使・遣唐使の貢献

7世紀初頭、聖徳太子が小野妹子、犬上御田耜（いぬがみのみたすき）等が率いる遣隋使を隋国へ派遣（607～614）。最後は滅亡寸前の隋国を見聞して帰国（615）。15年後新しい律令国家制度、文化吸収を目的に唐国（618～907）に遣唐使を開始（630～）。1隻当り百数十人を乗せた網代帆船で渡航。長年に亘り留学して政治制度、文化等を習得。多いときは4隻仕立てで約600人が渡航。回数説は種々あるが本参考文献では15回と推定されている。7世紀末、高松塚古墳（1972発見の飛鳥美人、四神）と、キトラ古墳（1983～2002発見の四神、天文図、十二支）築造の際、中国の陰陽（おんみょう）五行説、風水思想による四神相応の壁画が描かれたと推定されている。壁画は、石の壁や天井に漆喰を塗りその上に描かれている。日本書紀（720）に黄書画師（きぶにのえし）、山背画技師（やましらのえし）、黄文連本実（きぶみのむらじほんじつ）という画家集団が出てくる。遣唐使には百済・高句麗等の渡来人子孫たち多数が同行、長期留学して文化を輸入した。遣唐使は菅原道真の提案で廃止（894）、以降、民間外交等で独自に進化した。このように遣隋使・遣唐使は、270年間に亘り数千人が往来し律令体制形成に大きく貢献した。

4. 京の水文化

1) 恵みの水・怖い水 鴨川や葛野川は、平安京造営以来「あばれ川」として怖がれ、朝廷は「防鴨河使（ぼうかし）、防葛野河使という防水専門官を配置したが、当時の幼稚な土木技術では効果が出なかった。時の白河法皇は「なんでも思い通りになる世の中で、どうしてもままならぬものが3つ

ある。第1に鴨川の水、すごろくのサイの目、山法師の3つだ」と嘆いた。京都市水害誌（昭和11年3月）によると、延暦18年（799）から昭和10年（1935）までの1,136年間に、149回の市内洪水が記録されている。特に昭和10年（1935）6月豪雨は、安永7年（1778）以来157年目の大水害とされる。江戸幕末、凡そ30万人の人口を擁し、古よりお茶の七名水、西陣名水などと称される名水が各所で湧出したので、汲み上げられた水で茶道、醸造酒、豆腐、湯葉などの京料理が水文化の雰囲気醸し出してきた。また高瀬舟で有名な高瀬川や、大堰川筏流しなどの水運が古都の動脈として経済を支えてきた。しかし、維新以降は井戸水汚染、排水路不良が原因でコレラ等の水系感染症が蔓延し、水に関わる衛生面と殖産興業が近代化への大きな課題となり琵琶湖疏水開削へと動いた。

豊臣秀吉の名軍師黒田如水が、中国の王陽明などの説といわれている格言・水五訓「①自ら活動して他を動かしむるは水なり、②障害にあい激しくその勢力を百倍し得るは水なり、③常に己の進路を求めて止まざるは水なり、④自ら潔うして他の汚れを洗い清濁併せ容るは水なり、⑤洋々として大洋を充たし発しては蒸気となり雲となり雨となり、雪と変じ霰と化し疑っては玲瓏たる鏡となりたえるも其性を失わざるは水なり」これは水の特性と、人々の関わりを端的に表現している。

2) 京の伝統文化 京都には、京都三大祭（葵祭、祇園祭、時代祭）と、京都三大奇祭（今宮やすらい祭、太秦牛祭、鞍馬火祭）、及び京都三大火祭（嵯峨お松明祭、五山送り火祭、鞍馬の火祭）等が継承されている。遷都後は、貴船神社が賀茂川上流にあって水に関する政（まつりごと）の中心として位置付けられ、京都盆地の地下水涵養の水源、即ち水の神として支えてきた。社伝によると、玉依姫命（神武天皇の母）が黄船に乗って尼崎から淀川に入り、賀茂川を遡って、この地に留まり奥宮に黄船（きぶね）を残して昇天したという。境内には船形石といって船形の石塁（城堡）が祀ってある。水の神は竜神であって、高い所から水を湧き出す「高龍神」（たかおかみのかみ）が祈雨を、また谷底から湧き出す「閻龍神」（くらおかみのかみ）が祈晴を司る水神とされている。この「龍」の字は、龍神信仰を表現し雨冠に、祭壇の供物「ロロロ」と、龍を合成した文字となっている。貴船神社では毎年、水神信仰として雨乞祭、貴船祭、水祭、御火焚祭などの神事が執り行われている。

3) 水神さまの源流 今年3月9日、貴船神社で雨乞祭が行われたので水神さまの源流を辿ってきた。雨乞いは、古より各地で行われた農耕民族の伝統文化である。叡電貴船口から貴船川を凡そ500m遡ると、本殿で「雨乞祭」が行われていた。神職が鉦・太鼓を打ち鳴らしながら「雨たもれ、雨たもれ、雲かかれ、鳴神じゃ」と3回唱えた。更に、神秘的な樹齢千年の“相生の大杉”と、清流に驚嘆しながら凡そ300m行くと、奥宮本殿下に龍穴があって水神さまが鎮まるといふ伝説の源流に辿りついた。他にも上流の岩屋山志明院“飛竜の滝”や京都府宇治田原町湯屋地区“大滝”で「雨たもれ、龍王の天に、汁気はないかいな」と唱える神事や、京都神泉苑や愛宕山でも伝承されている。小生の郷里、京都府日吉町でも古老伝承によると雨乞いが江戸時代から伝わり、明治から昭和35年までに5回行われたという。昭和30年8月及び同35年8月の大旱魃時では、夜半前から早暁にかけて集落の一番高い山頂において先祖伝来の秘仏“千手千眼観世音菩薩”を祀り、「千束柴」を焚き、農夫達が只管に般若心経を唱える雨乞い“秘法を厳修”をしたところ慈雨（恵みの水）を齎したという。

4) 水道と神道の繋がり 一昨年の水道産業新聞で「あまり知られていない私の東京水道・歴史」で山田弘氏（元東京都水道局）が「江戸時代に玉川水神社を創建し水神さまを祀り“水を粗末にすると罰があたる”とか“丁重に扱えば、生きている人間を護ってくれる”と教えられてきた。先人達は森の百年、二百年先のことを広い視野、展望で一途に考えてきた」と述べられている。子々孫々に健全な森林を譲っていくため、今、水源涵養林を守る運動が各地で進んでいる。

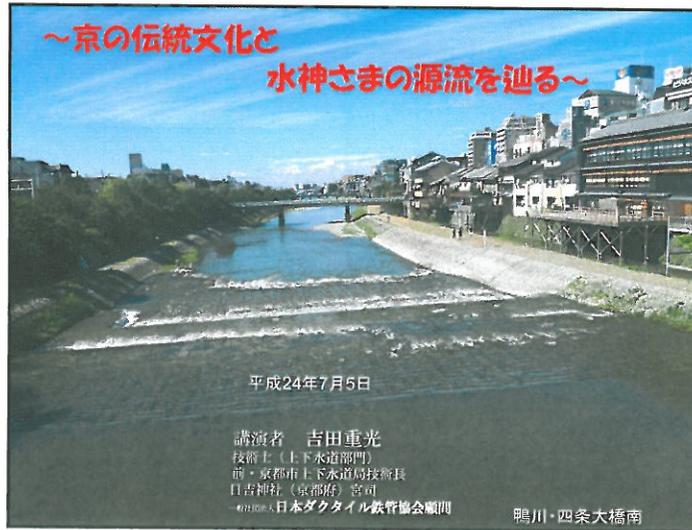
5) 伝統文化の継承 本年は、現存最古の古典・歴史書とされる古事記撰上から1,300周年。神話を始めとする歴史的な意味合いを検証しながら伝統文化を理解し、子々孫々に継承していくことも非常に大切なことである。

5. むすび

長年、京の水道に携わり蛇口の向こう側は知り尽くしたが、正直なところ平安京の向こうに何があったのか気に留めなかった。このたび素人ながら「水神さまの源流」の歴史を辿ってみて、改めて温故知新と伝統文化の継承の大切さを痛感した。また、今年は「陰陽五行説」で60年に一度の壬辰（みずのえたつ）の「物事が開ける年」「創生の年」に当たるお目出度の年といわれている。

皆様方の益々のご発展とご健勝、生命財産のご加護と開運招福をお祈りいたします。

（参考文献）教養日本史（青々企画）、詳説世界史（山川出版社）、遣唐使全航海（草思社）、京都いのちの水（京都新聞社）、恒久の都平安京（吉川弘文館）、平安京の生活と文学・考古学と古代史の間（筑摩書房）、朝鮮の歴史（KKベストセラーズ）、読むだけですっきり分かる日本史（宝島社）、神道のちから（学研パブリッシング）、日吉町誌（京都府日吉町）、川船（亀岡市文化資料館）、高松塚古墳資料館・飛鳥資料館・出雲歴史博物館P F、京都市水害誌（京都市水道産業・朝日・毎日・京都各新聞他



本日の話題

(趣旨) 本年は現存最古の古典歴史書・古事記撰上(712)から千三百周年。神話を始めとする歴史的な意味合い(古来天地神祇の国、仏教伝来、水神さまの源流?)を検証し、伝統文化を継承していくことは非常に大切なことと考えている

(内容) 1. 国づくり
 2. 平安京づくり
 3. 遣隋使・遣唐使の貢献
 4. 京の水文化
 1) 恵みの水・怖い水
 2) 京の伝統文化
 3) 水神さまの源流
 4) 水道と神道の繋がり
 5) 伝統文化の継承
 5. むすび

1. 国づくり 補足1-1~12

○時代区分と遷都の道程

～古墳時代(3世紀初頭～7世紀末)～飛鳥時代(6世紀末～8世紀初頭)

『魏志』倭人伝:邪馬台国女王卑弥呼が30カ国ほどの部落国家を統風、魏皇帝と交流:「親魏倭王」の称号と「金印紫綬」を授与(239)→3世紀後半(応神帝)から倭の国づくり始る。4世紀末(391)、半島に派兵「高句麗好太王の碑」で実証。5世紀→宋・齊・梁(りょう)と国交開きヤマト王権は急速発展

6世紀初頭、豪族大連・大伴金村が越前三國の男大迹(おおど:のちの継体帝)に即位要請! 第26代継体天皇(即位507)! 磐余玉稚宮(いわれたまのみや)(桜井市付近?)に都をおく(526) (註)伊予国風土記逸文「大山積の神(別名:三島大明神)は、難波の高津の宮に御宇しめし天皇(継体)御代に顕れましき、此神、百済の國より渡り来し坐す、御嶋と謂うは津の國の御嶋(高槻)」。高槻市に継体帝陵墓。今治市大三島町の大山祇神社御祭神は摂津國三嶋と所縁

継体帝と百濟第25代國王・武寧王(ムニョンワン501～523)は同盟関係。人的文化的交流が活発! 6世紀中頃、欽明天皇御代に百濟第26代國王・聖王(ソンワン523～554)が仏教伝来(538:一説552)、任那(連合国:任那日本府)滅亡(562)、推古女帝・聖德太子長政(593)、大化改新(645)、難波宮653(大阪市)、飛鳥河辺行宮653(明日香村)、近江大津宮667(大津市)、飛鳥浄御原宮673(明日香村)、藤原京694(橿原市)、大宝律令(701)

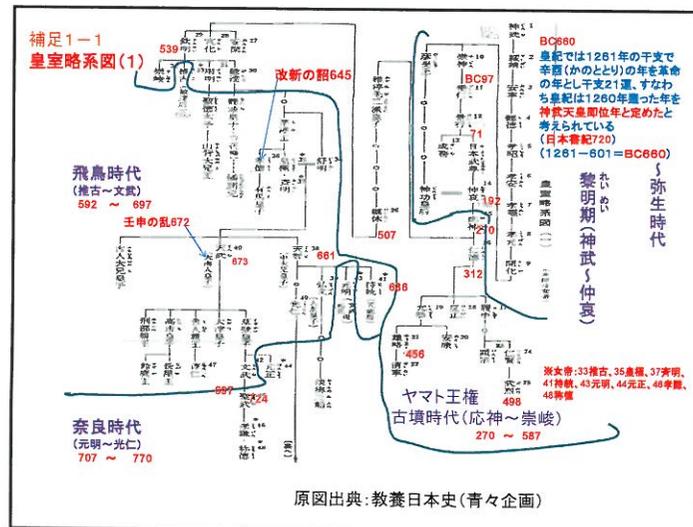
～奈良時代(約80年間)

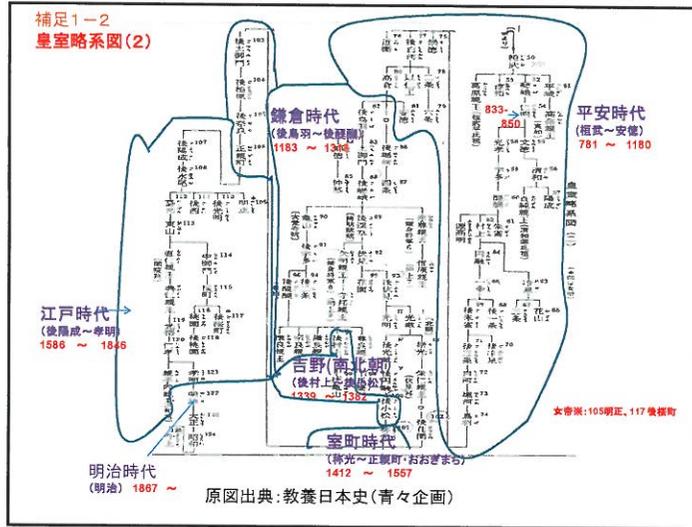
平城京710(奈良市)、恭仁宮741(木津川市)、紫香寮宮745・4ヶ月(甲賀市)
 平城京復都745(奈良市)、長岡京に遷都784(長岡京市)

～平安時代(約400年間)

平安遷都794(京都市)→古代中國都市計画理論・風水思想・四神相応
 ～鎌倉(約140年間)～室町(約60年間)～吉野(約60年間)～安土桃山(約30年間)
 ～江戸(約260年間)～東京奠都(遷都)

～慶応3年(1868)徳川慶喜の大政奉還、王政復古の大号令、慶応4年(1869)5月戊辰の役終り、同年9月東京奠都(遷都)、明治に改元! 京の都は、実に1,075年間に亘り栄華を極めた!





補足1-3 国づくりの原点 日本書紀: 応神天皇御代(270~310)御事跡

- (1) 海部(かいべ)や山部(やまべ)、山守部(やまもりべ)を定めて、海産物や山の産物を取める制度をつくった
- (2) 各地に治水の池を築いた。その際、朝鮮半島諸国からの渡来人が大きな役割を果たした
- (3) 百済の国王が、雌雄2頭の馬を阿知吉師(あちきし)という者に託して献上。阿知吉師は、横刀と大鏡を献上
- (4) 百済の国王に優れた人材を求め、王仁(わに)が「論語」などを携えて来朝

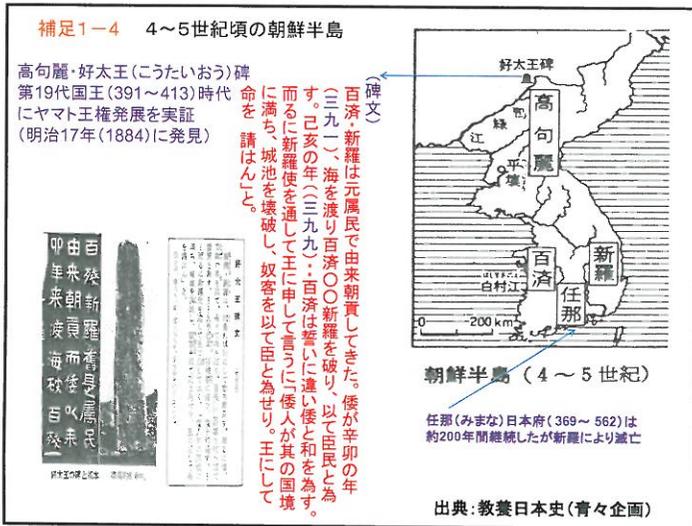
これらの情報から、当時、多くの渡来人が朝鮮半島から来朝し、最新の技術や文化がもたらされた。その結果、文明が一気に開化し、現在の大阪南部の地名を冠した「河内王朝」と呼ばれる時代が、応神天皇の御代からはじまったと考えられる。

つまり、国の基本となることが応神天皇御代にほぼ整えられ、のちの日本国の礎が築かれた。すなわち「国づくり」の始まりと考えられる

出典: 神道のちから (株)学研パブリッシング 田中恒清著

↓

※ ネット検索: 応神天皇時代、百済の渡来人氏族「阿智使主(あちのおみ)」が「檜隈(ひのくま)寺」を営む。その鎮守社「於美阿志神社(おみあしんじや)」の境内に檜隈寺跡あり。日本書紀に寺名が出てくる。明日香村はヤマト王権発祥地とされている。



補足1-5 ヤマト王権発展の謎

○ヤマト王権は誰が発展させたのか謎?

- ①ヤマト自生説(邪馬台国がヤマト王権を樹立? 別の勢力が樹立?)
- ②九州勢力が東遷(北九州の勢力が攻勢?)
- ③朝鮮半島からの騎馬民族(渡来人が征服?)

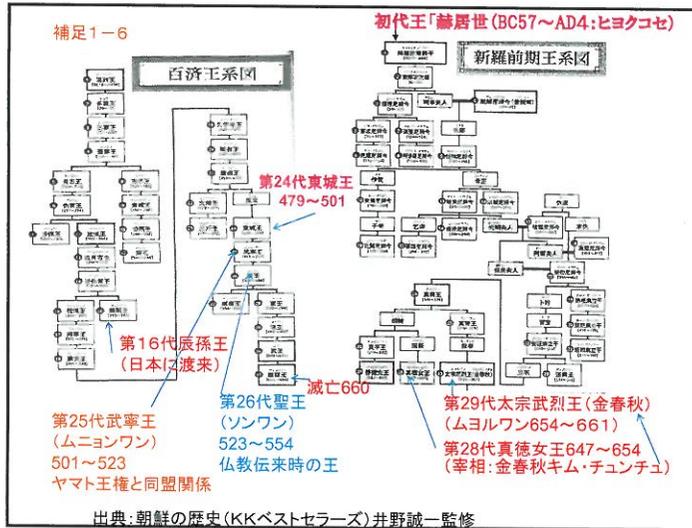
○倭の五王と推定天皇

讚(さん)王; ⑮ 応神または ⑯ 仁徳、または ⑰ 履中
 珍(ちん)王; ⑱ 反正または ⑲ 仁徳
 濟(せい)王; ⑳ 允恭
 興(こう)王; ㉑ 安康
 武(ぶ)王; ㉒ 雄略の各天皇に比定(実証なし)
 ※大陸の「〇〇王」と同じ「〇王」と表していた

○ヤマト王権

⑯ 仁徳(313~399) ~ (25) 武烈(498~506)。
 ⑰ 応神(270~310) ~ (26) 継体(507~531) → (27) 安閑(531~535) ~ 今上
 → 百済・王仁(わに)の使者=阿直岐(あちき)が渡来、「論語」「千字文」を伝来

ヤマト王権系統	百済王系統
(25) 武烈帝(498~506)	↔ (24) 東城王(479~501)
(26) 継体帝(507~531)	↔ (25) 武寧王(501~523) ... 同盟関係
(27) 安閑帝(531~535)	↔ (26) 聖王(523~554) ... 仏教伝来(継体帝の皇子)



補足1-7 では邪馬台国は一体どこにあったのか?

○古代中国史料「三国志」の一つ「魏書」の中に「東夷伝倭人」によると、三世紀の中頃、「邪馬台国」の「女王卑弥呼」が倭人の30程の部落国家を統属していたらしい。この女王は信仰(鬼道)と政治とを兼ね備えた政治を行い、帯方郡(朝鮮半島南部)を通じて魏に使者を送り、西暦239年、魏の皇帝から、「親魏倭王」の称号と「金印紫綬」を授けられた資料あり。三角縁神獸鏡を百個授与された

○邪馬台国の所在場所については、古くから九州説と畿内説(桜井市箸墓古墳?)が対立しており、現在も結論は出ていない

○「日本」の国名はいつ頃から呼ばれていたのか?
平成22年10月23日付朝日新聞、鈴木靖民国学院大教授の話では「古代史の大きな謎とされてきたが、中国吉林大古籍研究所の王連竜の学術雑誌論文から、678年ごろの墓誌に「日本」と記されていることから670年代であったことが確認できた」とされている(天武帝672?)

○「日本」と記された実物史料は、大宝律令(701年)からの見方が有力であった。2004年に西安市で発見された遺唐使・井真成の墓誌(734年)が最も古い実物史料とされてきたらしいが、今回が新学説とされている

○国史以前は先住民と、大陸南方、三韓から絶え間なく氏族が移住し集落形成



補足1-10 古代国家形成のドラマ「大化の改新」「白村江の戦い」

- 大化の改新(645)

第35代皇極女帝(即位642)、朝廷権威者の蘇我蝦夷・入鹿父子の横暴に対し中大兄皇子・中臣(のち藤原)鎌足が誅滅(645)。遣隋使として留学中の高向漢人玄理・僧旻が母国百済を経ず、新羅経由で宰相・金春秋(のち第29代太宗武烈王654~661)を伴って帰朝(640)、国博士(くにのしはせ)に任命され改革を推進。第36代孝德天皇が我が国最初の年号を「大化」(645)と定める。孝德帝の「改新の詔」。中大兄皇子が皇太子として万機を総理し新政を開始。近江大津京で天智天皇即位(661~671)
- 諸豪族の私有地・私有民の廃止、地方行政確立、庚午年籍(670):全国民に「姓」を名乗らす。馬飼部、錦織部、玉作部、土師(はじ)部、海部、鞆飼部等「技術者集団」の者はその部をそのまま「姓」とした。日本国号、班田収授法などの施策
- 白村江(はくすきのえ)の敗戦

朝鮮半島では唐・新羅連合軍が百済を滅亡(660) 百済から我が国に復興援軍要請あり斉明女帝が約3万人(国民数約500万人)の水軍派兵。白村江(はくすきのえ・錦江河口)で敗戦(663)
- 滅亡した百済から官僚・遺民が多数渡来(亡命)

日本書紀によると664年=男女400余名、665年=男女2千余名、668年=男女700名が渡来、近江国に移住。百済將軍らを唐来襲に備えて北九州沿岸の国防に派兵(防人)

出典:古代史の舞台裏(青春出版社)

補足1-11 壬申の乱

- 近江大津宮遷都

第38代天智天皇即位(661)と同じ年、半島では新羅第29代太宗武烈王(ムヨルワン654~661)が「新羅・百済・高句麗」の三国を統一(668) 更に新羅が唐勢力を追出す(676)
- 天智天皇崩御(671)の前後、唐使者約2千人が船47隻で交渉に来朝、朝廷と和議成立。369年から続いた任那(みまな)日本府(連合国家)の滅亡(562)以降、約百年の復帰努力も水泡に消え半島勢力が完全に消失した
- 「壬申の乱」(672)

天智帝息子・大友皇子と、弟・大海人皇子(のち天武帝)が近江大津宮を捨て飛鳥浄御原「檜隈(ひのくま)の地」に還都672(現明日香村)

 - ①皇位継承の争い ②貴族・豪族間の覇権争い
 - 大和・美濃・近江で二カ月戦、大海人皇子が勝利
 - なお、負けた大友皇子は第39代弘文天皇と記録されている
- ②第40代天武天皇(672)・持統皇后(天智帝娘)の御代!

➡ 中央集権体制に移行

補足1-12 日本国の形成時期はいつ頃なのか?

○昭和59年(1984)9月、韓国の全斗煥大統領訪 宮中晩餐会における陛下の「お言葉」 昭和59年9月7日付毎日新聞

「願みれば、貴国と我が国とは、一衣帯水の隣国であり、その間には、古くより様々の分野において密接な交流が行われて参りました。我が国は、貴国との交流によって多くの事を学びました。例えば、紀元6、7世紀の我が国家形成の時代には、多数の貴国人が渡来し、我が国に対し、学問、文化、技術等を教えたという重要な事実があります。永い歴史にわたり、両国は、深い隣人関係にあったのであります。今世紀の一時期において、両国の間に不幸な過去が存したことは誠に遺憾であり、再び繰り返されてはならないと思います」

(注)以前の高校教科書「新編日本史」では「4世紀後半」とされていた。

平成2年5月24日 宮中晩餐会における陛下の「お言葉」 「桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であると読日本書紀に記されている・・・」

※1 生母は「高野新笠(たかののいかさ) 百済第25代国王・武寧王(ムニョンワン) (501~523)の末裔

※2 仏教勢力台頭の平城京を離れ、長岡京・平安京へ遷都。桓武帝の父弘仁帝が編纂していた「続日本紀」を引き継ぎ菅野真道が完成した

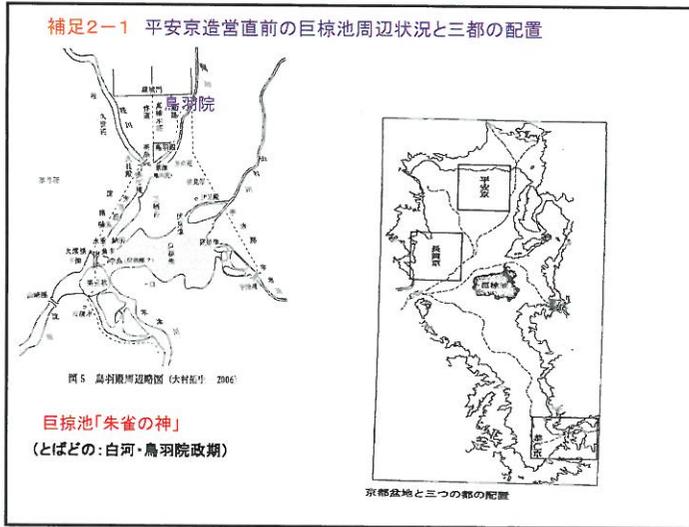


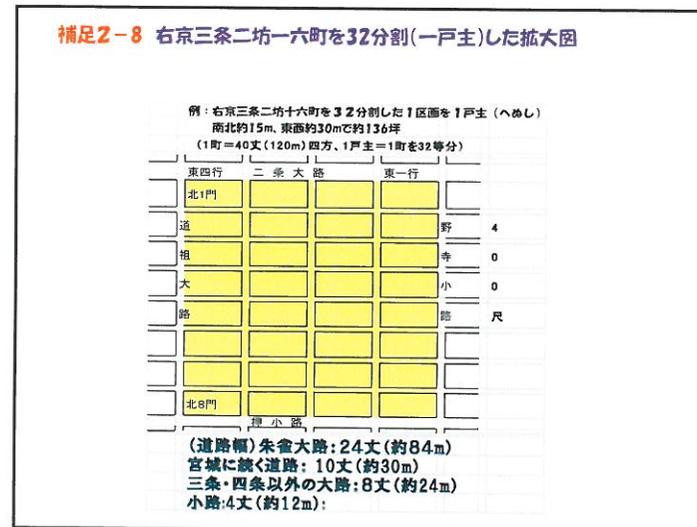
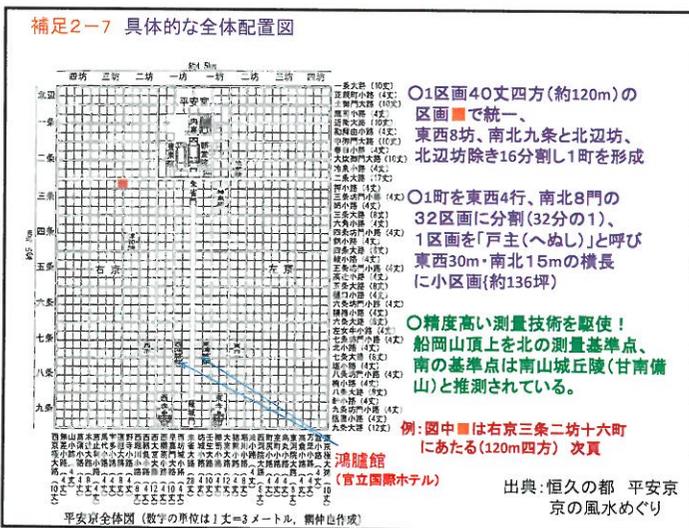
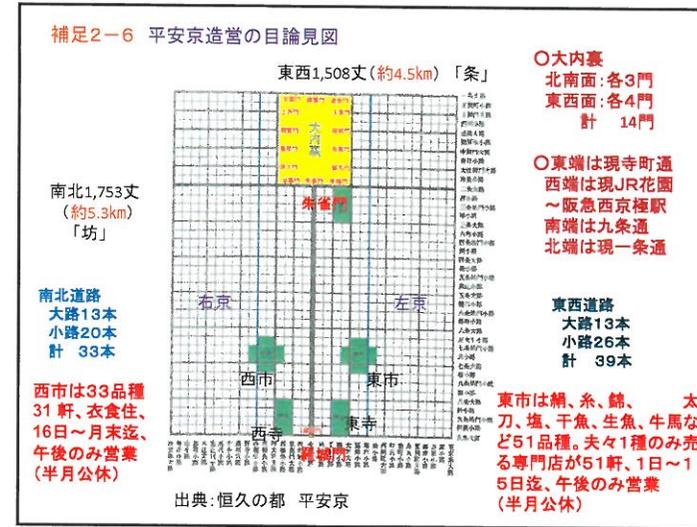
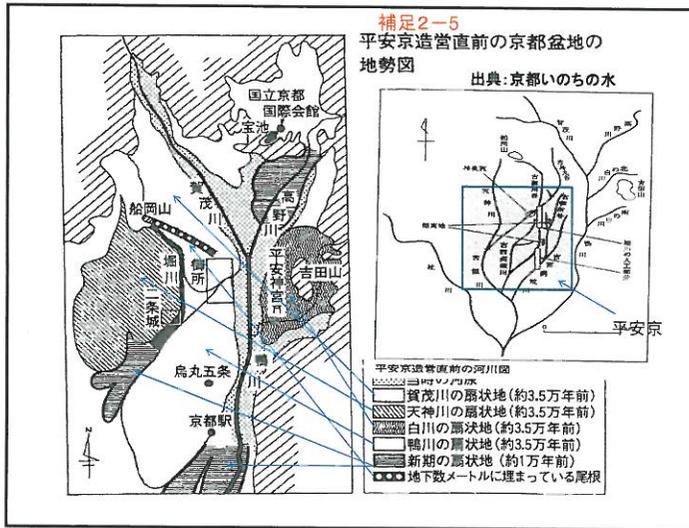
2. 平安京づくり

補足2-1~12

- (1)平安京造営計画
- 4~7世紀に各地に渡来人が移住(帰化)し、養蚕、鍛冶、醸造など多くの技術や文化を輸入、さらに6世紀中頃、百済より仏教伝来、産業・経済が飛躍的に発展!
- 5世紀に、秦始皇帝(BC221~BC206)の子孫秦氏(はたうじ)が渡来。古墳時代後期以降農地開発で勢力を蓄え、長岡京と平安京の造営に大きく貢献。長岡京造営わずか10年で遷都→①度重なる洪水、②藤原種継暗殺と早良親王(桓武帝弟)流罪に対する怨霊
- 桓武天皇の平安遷都詔「山河襟帯、自然作城」、延暦12年(793)大納言藤原小黒麻呂、百済僧・靉陸(かんろく)、賢環(けんけい)らが地形調査、古代中国の都市計画理論で都選定(風水思想と四神相応)①都に適した地は、四方に四神鎮まるところ(山背国) ②夫々にツボがあり、大地の旺盛なエネルギー(気)が湧出
- (具体的な場所) 四禽(神獸)
 - 東方に流水あり: 青龍の神→八坂神社本殿床下の井戸
 - 南方に窪地あり: 朱雀の神→巨椋池
 - 西方に大道あり: 白虎の神→松尾大社の亀の井
 - 北方に丘陵あり: 玄武の神→船岡山・貴船神社







3 遣唐使・遣唐使の調査 補足3-1~7

出典: 遣唐使全航海(思想社)

○遣隋使派遣 (隋国581~618)
 推定全6回派遣(600~614)
 ①不詳(600) ②小野妹子・犬上三田邨等(607) ③不詳(608) ④小野妹子・留学生8人等(608) ⑤不詳(610) ⑥犬上三田邨等(614)帰国(615) 隋国滅亡(618)
 ※小野朝臣妹子(おののあそいもこ):滋賀県志賀町小野の「唐白山古墳」が墓地と推定

○遣唐使派遣 (唐国618~907)
 国家制度、文化、技術輸入目的で推定全15回派遣(630~894)
 長さ約30m×幅8mの綱代帆船で怒涛の東シナ海700kmを凡そ1週間で横断。
 唐都長安まで三千里の旅。大型船の建造、渡海術の輸入により渡航可能となる。
 (飛鳥時代)7回→船数11往復、(奈良時代)6回→船数17往復、(平安時代)2回→6往復
 全15回船数34往復、ほか3船遭難。渡航者推定凡そ4千人(@120人×34)、
 264年間、平安時代第14回(804)は4隻約600名、第15回(838)は3隻約450名も。
 (空海804~806、最澄804~805)

○西暦607年~894年(最終)→270年間に亘り律令国家の形成と発展に大きく貢献。
 延べ数千人の渡来氏族子孫が請益僧、留学僧として渡航。長期留学して帰朝。
 遣唐使の歴史で最も有名な人物は阿倍仲麻呂。第8回(717)19歳で長安大学に留学、科学合格、玄宗帝に認められ官吏登用 36年後、帰国途中ベトナムに漂着、唐に帰還し73歳で長安にて没。また井真成は渡唐後17年(36歳)で病死。弁正留学僧は唐貴族となり遷俗。。

○菅原道真が遣唐使廃止を提案廃止(894)、九州大宰府へ、2年後没。「東風(こち)吹かば にほひおこせよ 梅の花 あるじなしとて 春な忘れそ」の詩は有名らしい。

補足3-1 航路推定図




出典: 遣唐使全航海(思想社)

補足3-2 古代人口は一体どれ位だったのか?

○元東京大学名誉教授 埴原和郎(はにはらかずお)氏の説

- ①約1万年前(縄文時代早期).....約2万人
- ②約5,500~4,700年前(同中期):約26万人 (東日本25万人、西日本1万人)
- ③約2,300年前(縄文晩期).....約7万人
- ④7世紀頃(飛鳥時代).....約540万人
- ⑤8世紀初頭(奈良時代).....約863万人

縄文晩期以降、約1,000年間に少なくとも数10万人、多く見積もっても1,000万人
 出典: 古代史舞台裏(青春出版社)

4~5世紀は漢(あや)系、5~6世紀は百済系、7世紀半は百済・高句麗系か?
 ※漢氏族: 半島南部の安耶、安那など百済系小国家

○平安時代初期編纂「新撰姓氏録(しんせんしょうじろく)」
 中央氏族1,065氏のうち、渡来人氏族326氏(約30%)
 内訳 漢系163氏(約50%)、百済系104氏(約32%)、
 高句麗系41氏(約13%)、新羅系9氏、任那系9氏

補足3-3 明日香村調査結果





高松塚古墳 (H20.10.17)

出典: 大和の考古学(権原考古学研究所)

補足3-4 高松塚古墳、キトラ古墳壁画(明日香村)

○「記・紀」「続日本紀」にみる「**檜隈(ひのくま)の地**」にある古墳群
 帝国書院発行「高校日本史」に「渡来人」とされる漢(あや)氏族の飛鳥の根拠地は「檜隈(ひのくま)の地」とされている。

○「続日本紀」: 文武帝(697)~桓武帝(791): 94年間の漢文歴史書を菅野真道が完成「凡そ高市(たかいち)郡内は檜隈忌寸(ひのくまいみき)及び一七の県(あがた)の人夫地に満ちていす。他姓の者は十にして一、二なりき」とある。

○都が飛鳥浄御原宮(672)に在った頃**の古墳発見**(榎原考古学研究所発掘調査)ここに高松塚壁画古墳、キトラ古墳があった。高松塚古墳の壁画は飛鳥美人、玄武など昭和47年(1972)3月発見。キトラ古墳の壁画は玄武など昭和58年(1983)~平成2年(2002)発見により古代史の転機となった。

○遣唐使初期(630~671)に派遣された留学生が古代中国の文化、壁画技術等を持ち帰り、飛鳥檜隈の地での古墳築造時に描いたものと考えられている。

日本書紀(720)に藤原(中臣)鎌足(百済系)息子・不比等が編纂)、黄書画師(きぶにのえし)、山背画師(やましろのえし)という画家集団が出てくる。いずれも6世紀頃の渡来氏族と考えられている。なかでも黄文連本実(きぶみのむらじぼんじつ)が有力候補といわれている。

補足3-5 高松塚古墳1972発見
 「高松塚古墳記念館パンフ」より

H22.5.4朝日新聞

明日香村

飛鳥美人

飛鳥寺

欽明・文武帝陵

天武・持統帝陵

高松塚古墳

キトラ古墳

平野塚穴山古墳

於美阿志神社

檜隈寺跡

玄武

白虎

朱雀

東へつらがり

補足3-6

高松塚古墳切り石
 と
 平野塚穴山古墳切り石

高松塚と切り石一致

奈文研調査

平野塚穴山古墳 寸法・材質

H24.7.4朝日新聞

補足3-7 於美阿志神社 檜隈寺跡
 於美阿志神社・檜隈寺跡

H24.6.10撮影

於美阿志(おみあし)神社

檜隈寺跡・十三重石塔

宣化帝(継体帝皇子)檜隈宮跡碑

檜隈は、百済から渡来した阿智使主(あちおみ)が居住したと伝えられ、於美阿志神社はその阿智使主を祭神とする。檜隈寺跡はその神社の境内にあり、塔講堂と推定される建物跡をのこす。「日本書紀」天武天皇朱鳥元年の条に檜隈寺の寺名がみえ、寺跡からは七世紀末の瓦が出土する。現在、塔跡にある十三重石塔が上層の一部を欠いているが重要文化財に指定されている。

明日香村
 飛鳥保存財団



4. 京の水文化

補足4-1~6

1) 恵みの水・怖い水

- あばれ川「鴨川」
遷都後、「防鴨河使(ぼうかし)」「防葛野河使」: 防水専門官配属したが、京都の水害誌(昭和11年3月): 延暦18年(799)~昭和10年(1935)まで1,136年間に149回の市内洪水記録あり。ほぼ8年に一度洪水発生特に昭和10年6月洪水は、安永7年(1778)以来、157年目の大洪水
- 江戸幕末
凡そ人口30万人。地下水利用した京料理など水文化が発展
江戸時代の動脈: 高瀬川、大堰川、淀川本流など舟運が平安京を支えた
- 明治維新
文明開化、水系感染症蔓延、近代化への大きな障害、殖産興業へ…

いつの時代でも、先人たちは水と深く関り

智慧と工夫を凝らしながら、都を守ってきた!

補足4-1 龍は水神の化身、格言・水五訓

○中国で龍は、想像上の霊獣。我が国では水神の化身(けしん)、大地が旱魃になれば淵から出現して昇天し、時には暴れて洪水を起すので、水の神さまとされている

○格言・水五訓
豊臣秀吉名軍師「黒田如水」か、中国明代「王陽明(1472 ~ 1528)」などの説がある有名な格言・水五訓

- ①自ら活動して他を動かしむるは水なり
- ②障害にあい激しくその勢力を百倍し得るは水なり
- ③常に己の進路を求めて止まらざるは水なり
- ④自ら潔うして他の汚れを洗い清濁併せ容るは水なり
- ⑤洋々として大洋を充たし発しては蒸気となり雲となり雨となり、雪と変じ露と化し凝っては玲瓏(れいろう)たる鏡となりたえるも其性を失わざるは水なり

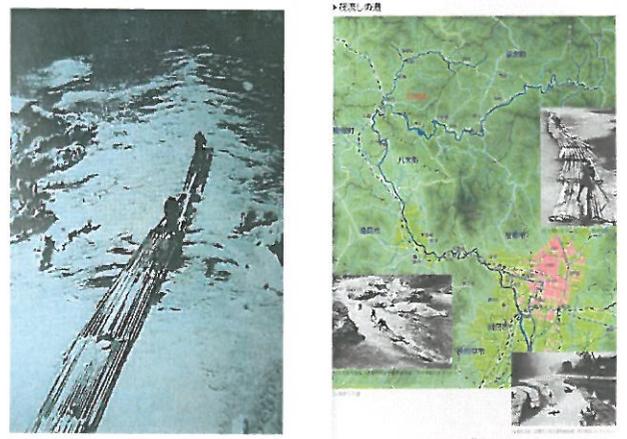
補足4-2 平安京を支えた大堰川舟運



- 大堰川(明治29年以降淀川水系桂川)は、京都市北部に源を発して、丹波高原、亀岡盆地、京都市を貫流し、鴨川と合流。更に宇治川、木津川を合わせて三川合流点に注ぐ約110kmの一級河川。有史以前から「母なる川」。通称名: 嵐山付近は大堰川、下流を梅津川・桂川、上流を保津川・大井川・上桂川
- 奈良時代から保津川水運が存在。平安遷都後、上流山園(旧京北町)黒田地域が禁裏御料柚役(きんりごりょうそまやく)に指定以来、丹波材木は全て筏流して運搬
- 角倉了以が保津峡開削
急流の保津峡を慶長11年(1606)3月から8月に開削。世木村(旧日吉町)から嵯峨までの約40 km。舟運で米、薪炭、石材等を京都への運搬。独占有料事業
- 筏流しの仕組み
①山方が河川中継点まで運搬、②筏間屋、③材木問屋へ運搬の3つに大別。
明治32年鉄道開通、トラック輸送に押され昭和22年までに 完全消滅!

◎材木集積港

補足4-3 大堰川筏流しの様子



大堰川の筏流しの様子

補足4-4 高瀬舟の舟運

○高瀬川の総延長は、木屋町二条一之船入から鴨川交差点まで約4.9km、鴨川樋門から伏見終点(淀川)まで約5.6km、合計約15.1km(推定)

工事を指導する角倉了以・息子素庵親子



木屋町二条一之船入跡

○高瀬舟の規模
幅約2m 長さ約13m
平底で船が上がった構造、15石(2.25t)積
大正9(1920)年まで
3百余年に亘り
都の経済を支えた

補足4-5 高瀬川の開削



高瀬川敷策マップ

○天文23年(1554)生れ、角倉了以と息子素庵父子は、大堰川舟運開削の経験から京都・伏見・大坂の舟運ラインを構想
慶長16年(1611)幕府から開削許可

○二条から七条までは、秀吉が築いたお土居の側溝を利用し工期短縮

○七条以南は、既存の農業用水路を利用して緩やかな勾配確保

○高瀬船名は、平安時代から使われており、高瀬川では長さ約13m幅2mの平底、積載量15石(2.25t)

○水深約30cmで水量が少ない時は水路の「堰止め石」に堰板を差し、堰き止め水流の勢いで下った。米、薪炭、材木、塩、肥糞等生活必需品を輸送した

補足4-6 淀川本流の舟運

大坂・天満橋の「渡辺ノ津」

平安時代より鎌倉時代にかけて、皇族・貴族が紀州熊野に参詣する道の船着場
慶長8年(1603)幕府が京都伏見を結ぶ舟運を開設。ここを「八軒家」と呼んだ。川御座船(客船)、三十石船(米船)、今井船(鮮魚用)、上荷船(貨物用二十石積)、淀二十石船(宇治川、木津川も航行)、茶船(荷物・乗客用十石積)など各種船を取締まる過書坐(通行手形)発行。三十石船は長さ約16.5m×幅約2.4m 乗客28名程度、船頭4名 最大二百石積。昼夜を問わず運行。昼上り、夜下りで半日から1日かけて上り下り
枚方辺りでは小船を漕ぎ「酒くらわんか、飯くらわんか」と寄って来て、物売りする「くらわんか船」が名物だったとか。ここから熊野三社まで→九十九王子(案内役)があった



京阪天満橋「永田屋昆布本店」前史跡

江戸時代の渡辺ノ津

舟中聞ニ子規一 城野静軒

八幡・山崎「春欲暮
杜鵑」啼レ血落花流」
一聲有レ月一聲水
聲裏「誰人半夜舟」

しゆうちゆう しきをきく(意解)

淀川を下り、八幡・山崎を通過すれば春も終わろうとして
いる。どこかで、杜鵑(とりのホトトギス)が血を吐くよう
な声で鳴いており、花は川面に散って静かに流れている
その一声は月の中にあるかと思われ
一声は水の中にも、とどかんばかりに思われる
夜半の舟中での感慨は、ひとしお痛切なものがある
(きの、せいけん、熊本県生まれ、一八〇〇〜一八七一)

※作者は江戸時代、京都より大坂へ下る舟中、天王山
を過ぎる辺りで月夜のホトトギスの声を聞いて作った。

補足4-7 淀川船下りの情景を吟詠

補足4-8~13

2) 京の伝統文化

◎京都で有名な伝統文化

- ①京都三大祭・・・葵祭(5/15下鴨神社)、祇園祭(7/1~7/31八坂神社)
時代祭(10/22平安神宮)
- ②京都三大奇祭・・・今宮やすらい祭(4月第2日曜)、太秦牛祭(10/10) 鞍馬火祭
- ③京都三大火祭・・・五山送り火祭(8/16) 嵯峨お松明祭(3/15) 鞍馬火祭(10/22)
孟蘭盆会①左大文字 ②妙法 ③妙 ④船形 ⑤鳥居形

◎貴船神社の祭

- ①雨乞祭(3/9):平安京の水に関する政の中心地
- ②貴船祭(6/1):水神さま祭礼
- ③水祭(7/7):同上
- ④御火焚祭(11/7)

◎鞍馬寺・由岐神社の火祭(10/22) ほか多数

補足4-8 日吉神社(京都府)の馬馳け伝統神事 由来:江戸時代中期
京都府南丹市指定無形民俗文化財
(毎年10月第3日曜日)

庚申信仰(七色の幡)
現代は夜11時~8分間隔
で栗・ぜんざい・栗・枝豆・
菓子・かまぼこ・甘酒の七
膳を深煎の儀式として行う

馬手3名、馬場屋、稚児を船代が接待

地域の選り勝手を競う馬場屋(はかり)

前ふれ太鼓(祇園囃子と同じ)

三頭馬が地域を巡回

流鏝馬

補足4-9 祇園祭・八坂神社神事
天変地変・疫病退散祈願御霊会以来の伝統文化

七月一日~七月三十一日

八坂神社神事由来
貞観11年(869)
6月7日~

時代背景

- 世界最古目撃の隕石
貞観3年(861)
- 富士山噴火
貞観6年(864)
- 貞観大地震(M8.3以上)
貞観11年(869)5月26日
- 天然痘蔓延

7/14~7/16 富山 神事
7/17 山鉾巡行・神輿祭
7/22 還幸祭(後の祭り)
7/31 夏越祭(厄祓)

葵祭(5/15)下鴨神社神事
飛鳥時代~

3)水神さまの源流 補足 4-10~15

○水神さまの源流がここにあった!?

高い所から水を湧き出す(源泉)・・
「高龍神(たかおかみのかみ)」

谷底から水を湧き出す(源泉)・・
「闇龍神(くらおかみのかみ)」

↓

京の地下水の源泉
 祈雨と止雨を司る水神さま

龍(おかみ)は龍神信仰
 「雨冠」、「祭壇のお供物口口口」、「龍」の合成文字

補足4-10 貴船神社奥宮の船形石

○伝説 「5世紀初頭、玉依姫命(神武天皇の母)が黄船に乗って尼崎、淀川、鴨川、黄船川を遊って当地に上陸、そこに祠を営んで水神を祀ったのが当宮の起り」その時の黄船を小石で積み固めたのが、写真の船形石(石塁)とされている

○「黄船」の語源は木生根、木生嶺で樹木の生い茂る山林の神として祀られた。平安遷都以降、「玄武」に位置し、しかも宮城の御用水である賀茂川の水源地であることから「水神」を祭神とされたという。奥宮本殿下に龍穴がある(社殿改修中)




相生の大杉
黄船の船形石

補足4-11 貴船神社“雨乞祭”



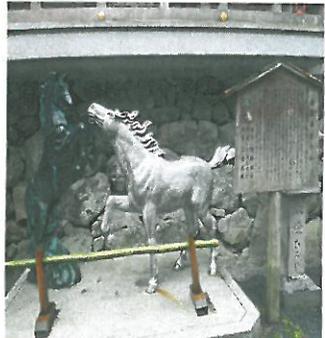
貴船川の清流




H24.3.9撮影

補足4-12 湧き出る神水と奉納馬

○平安時代の文献によると、祈雨(雨天時)には黒馬を、祈晴(止雨時)には白馬または赤馬を奉納したという。ときには生馬に換えて板立絵を奉納。今日の絵馬の原形。また、源義経も源氏再興を祈願したとされる

補足4-13 京都府宇治田原町湯屋谷での雨乞



H24.3.23撮影

○宇治田原町湯屋谷大滝
毎年9月1日に行われる伝統神事

○この溪流でウナギに神酒を飲ませて滝に放流しながら

雨 たもれ
龍王の天に
気はないかいな

神職が数回唱えて雨乞い祈願

補足4-14 丹波高原での雨乞い

○京都府日吉町の雨乞い伝承

古老の伝承。江戸時代？詳細不詳。明治初期から昭和35年までの「大旱魃時」に5回行われた。同35年には農夫80戸が参加し、集落の一番高い山頂に祭場を設けて、京都の音羽山清水寺由来の先祖伝来秘仏「千手千眼観世音菩薩」を祀り、水の神さまである帝釈天から授かった種火をもとに「千束柴」を焚き「般若心経」を何回も唱える「雨乞い秘法を厳修」と、2日後には前回の昭和30年と同じく「慈雨」を齎したという



丹波高原の田園風景 H24.6.24



昭和35年8月11-13日京都新聞

補足4-15 秘仏「千手千眼観世音菩薩」とは？



京都音羽山清水寺由来の仏像

○千の手、千の目をもって衆生を救済する尊(みこと)で慈悲の究極である徳を表す全ての生き物と人々を救う大悲観音の教え

- ①真観・真実、心理を愛す心
- ②清浄観・清く済んだ、利他心
- ③廣大智慧(けい)観・平等観
- ④悲観・他の苦しみを共観
- ⑤慈観・他の楽しみ喜びを共観

○江戸時代初期作木像。雨乞いで痛みが酷く昭和55年に補修

○頭に11の顔、42本の手をもつ

4) 水道と神道の繋がり

○東京都水道局(羽村市)に鎮座していた6箇所の水神さま

昭和42年当時①金町浄水場に江戸川神社、②玉川浄水場に玉川稲荷大明神、③砧上(きぬたかみ)浄水場に砧水神社、④狛江浄水場に狛江水神社、⑤境浄水場に水神社、⑥砧下(きぬたしも)浄水場に砧下神社の6箇所浄水場の小高い処の社殿に「水神さま」が祀られ、昭和40年頃まで神事祭りが盛大に行われてきた。

出典：「余り知られていない私の東京水道・歴史散歩」元東京都水道局 山田弘氏 H22.11 水道産業新聞

○水神さまをめぐる状況

明治政府が神道国教化政策に基づき廃仏毀釈(排斥運動)、戦後・昭和20年12月15日、GHQ「神道指令」、神社神道解体、新憲法で「政教分離」、昭和27年4月サンフランシスコ講和条約発効で独立回復、昭和21年宗教法人設立により神社神道を宗教化、皇室祭祀と神社神道との関係回復、建国記念日制定、伊勢神宮と皇位不可分(式年遷宮)、昭和50年(1975)以降、行幸時「三種の神器」を伴うなど規模縮小したが伝統を継承

○先人達の自然の恵に感謝する気持ちが、水源保全林に鎮まる「山の神・水の神」信仰に繋がったと考えている。自然と共存共生し、良好な水源保全林を子々孫々に継承する取組みと、伝統文化を理解し、継承していくことは非常に大切→水源保全の動き！

5) 伝統文化の継承 補足4-16~33

- 京都には神社仏閣が多く存在、伝統文化の根底をなしている
 - ①地域社会や集団内で広く行われ、学ばれて継承
 - ②人間の営みと生み出された成果がすべて伝統文化
- 長年、水道に携わり蛇口の向こうは知り尽くしたが、正直なところ、平安遷都までの歴史に気を留めなかった
このたび、水神さまの源流を辿って温故知新と、伝統文化継承の大切さを痛感した

○ご参考のため、平成24年6月3日初実施
神社検定(神道文化検定)公式テキスト(3級)を参考に
「あまり知られていない神社」について少々ご紹介

補足4-16 あまり知られていない「京都三奇鳥居」

○蚕の社の石製三柱鳥居
京都市大森・木場(このま)神社
大宝元年(701)、秦氏建立



昔はここから自噴水

○伴氏の鳥居(北野天満宮境内)柱が太く珍しい。鎌倉時代の石製鳥居、道真の御母堂大伴氏が祀ってある。道真公の精神和魂漢才;自国の誇りと他国の文化も受け入れる寛容の精神



○嵯峨神社の唐破国鳥居
京都御苑・西南角
平清盛の御母堂が祀られている



補足4-17 神道の世界

- 神信仰の大分類
 - ①造化神:宇宙創造を司る神(神社神道の基本理念)
 - ②自然神:自然や霊力を神(日・月・星・植物、物)
 - ③人格神:人間を神とする(祖神と現人神)
- 神社神道の特徴
 - ①日本民族固有の信仰
自然・祖先・人々とともに生きる。絶対神を持たない
 - ②神社神道の根本
記・紀(古事記・日本書紀)を重視
 - ③過去・現在・未来を三区別した場合、何よりも現在を重点
中今=このときを一生懸命に生きること
- 神道の種類
 - ①神社神道・経典、教義をもたない八百万神(やおろずのかみ)
 - ②教派神道・教祖・経典に基づく神
 - ③民族神道・民族の信仰
- 神職の階層:浄階 明階 正階(権正階) 直階
- 人間の道徳:仁(思いやり懐け) 義(公正心) 礼(礼節) 智(智慧) 信(信用)
(孔子・儒教「論語」) 廉(自己に厳しく人に優しく) 勇(人の為に立つ)

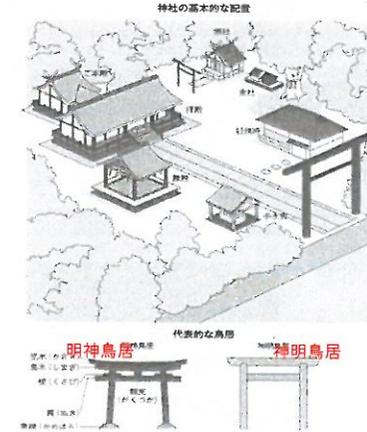
補足4-18 神宮、大社、神社の名称はどこから来たのか?

- ①名称は神社名につく「称号」または「社号」を表す。
- ②「神宮」の社号が付されている神社は、皇室の祖先神(おやがみ)を祀る
橿原神宮(奈良):神武天皇、平安神宮(京都):桓武天皇と孝明天皇、明治神宮(東京):明治天皇で祭神としては天皇を祀る神社。ほか石上(いそのかみ)神宮(奈良)、鹿島神宮(茨城)、香取神宮(千葉)、熱田神宮(愛知)と限られている。かつては伊勢、鹿島、香取だけ
- ③古くは「大社」といえば、かつては出雲大社(島根)だけ
ご祭神「天孫降臨神話」で「国譲り」を行い、多大な功績を遺した大国主神(おおくにぬしのかみ)、明治以降、戦前までは大社の称号は出雲のみ。戦後は、諏訪(長野)、春日(奈良)など
- ④神社の起源・神社は神の社(やしろ)。ヤシロの語源は「屋代」とする説
また、新羅初代王「赫居世(BC57~AD4:ヒョクコセ)の祖神廟建立(487)から「神宮」に
→ヤマト王権も同じく神宮とした? 社=コソ→居世(コセ)から出たとする説もある
江戸時代考証学者伴信友は「神社とは古會(コン)の事」と記している
- ⑤「宮(みや、ぐう)」の社号は、神宮と重なる
宮崎宮(福岡)のように古くから呼称されている神社、天皇や皇族をお祀りされている神社に用いる。ミヤの語源は「御屋」が有力説。建物に「御」の敬称を付けた説

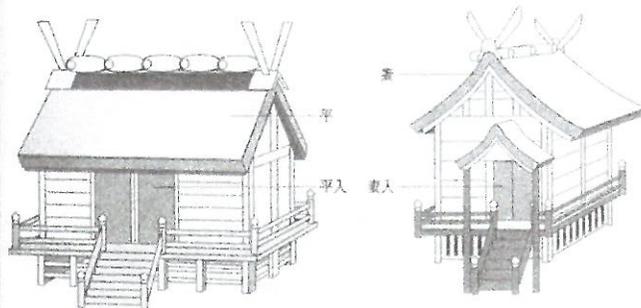
補足4-19 社殿の種類(神明造、大社造、住吉造等)

- ①弥生時代からの高床(ゆか)式の敷倉から派生した「神明造」(伊勢神宮等)
屋根の形が切妻造で面に見える。入口は屋根が面に見える部分(平入)、木材には色を塗らない素木(しらき)。棟に千木(ちぎ)と鯉木(かしき)、特に伊勢神宮は、掘立柱で茅葺(かやぶき)で「唯一神明造」という
- ②古代の住居から発展した「大社造」(出雲大社等)
屋根の形が切妻造で屋根が三角に見える部分に入口(妻入)がある
- ③大社造から派生した「住吉造」「春日造」
「住吉造」は本殿内部が広く前後2室。入口の階段に屋根がなく柱は朱色、壁は白色に塗られている大阪の住吉大社にみられる様式
- ④「神明」「大社」「住吉」は、奈良時代(8世紀初頭)以前の形式
「春日造」は、妻入の正面に屋根を付き出し、庇(ひさし)となる「向拝(こうはい)をつけたもの。柱と柱の間が1つしかない1間の造りが多い
- ⑤奈良時代から平安時代の形式「流造」
神明造の「平入」の正面屋根を延ばして「向拝」とした形式

補足4-20 神社の基本的な配置



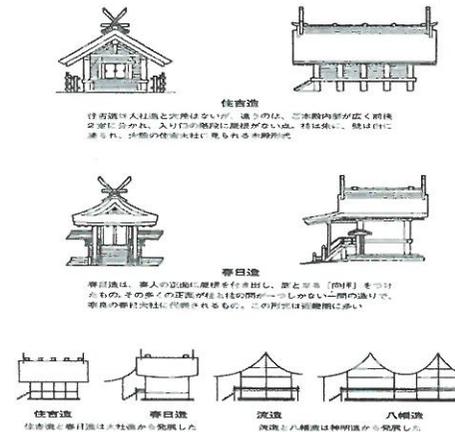
補足4-21 神明造、大社造



屋根の形状は代表的な形式の切妻造で、屋根が面に見える部分である平側に入り口がある平入の構造になっている。使われる木は素木のままで、欄干には千木と鯉木が設けられる

屋根の形状は代表的な形式の切妻造で、屋根が三角に見える部分である妻側に入り口がある妻入の構造になっている。使われる木は素木のままで、屋根には千木と鯉木が設けられる

補足4-22 住吉造、春日造、流造、八幡造、日吉造

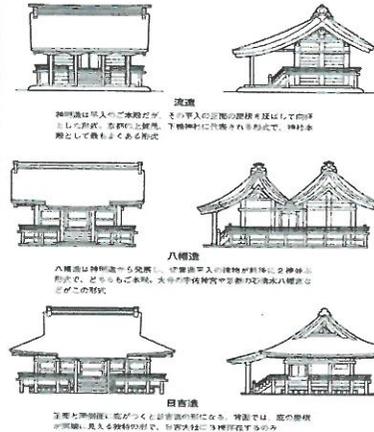


住吉造は大社造と大社造は違いますが、造りののは、本殿内部が広く前後2室に分かれ、入り口の階段に屋根がない。柱は朱色、壁は白色に塗られ、大阪の住吉大社にみられる様式

春日造は、素木の空面に屋根を付き出し、庇(ひさし)をつけたもの。その庇の下面が広く前後2室に分かれ、入り口の階段に屋根がない。柱は朱色、壁は白色に塗られ、奈良の春日大社にみられるもの。この形は前期に多い

住吉造と春日造は大社造から発展した
流造と八幡造は神明造から発展した

補足4-23 流造、八幡造、日吉造



流造
神明造は平入の二束造だが、その平入の梁の建物を延ばして向拝とした形が、鳥居の上を流し、下は神社に付属される形式で、神社を隔ちて敷くことになる形式

八幡造
八幡造は神明造から発展し、伊弉諾伊弉册の建物が対峙した神母三郎形式で、そのうち八幡造、天守の中核神代や神代八幡造などがこの形式

日吉造
天照大神御座、鳥がつくこと言霊の形になる。神代では、鹿の鹿鹿が流し、鳥入る鹿の鹿鹿で、鳥居神社にも神代存在するのみ

補足4-24 古事記神話の中身

天武天皇(672)「歴史というものは、ただの昔話ではなく、国家の構成要素であり天皇統治の基礎であって非常に大きな意義あり間違ったことは許されない」と帝紀・皇紀の整理を発案。元明天皇が神田阿禮に調習。太安万侶が筆録。和銅5(712)年、正月28日献上

- ①世界の始まり: 天上界に「天乃御中主神、高御産巢日神、神産巢日神」出現
- ②日本列島の誕生: 神世七代に「伊邪那岐神」「伊邪那美神」現わる
大八島国(淡路島、四国、隠岐島、九州、杵岐島、対馬、佐渡島、本州)
- ③黄泉の国の訪問
- ④三貴子誕生(禊祓→左目:天照大神、右目:月読命、鼻:須佐之男命)
- ⑤誓約(うけひ)と罪の起源:須佐之男命の天津罪(農耕妨害)
- ⑥天の岩屋戸こもり(闇夜、八百万の神々集合、祭、天宇受売命と天手力男神)
- ⑦八咫大蛇退治(須佐之男命は出雲・斐伊川に降臨。大蛇尾から剣、これを天照大神に献上。剣は後に倭比売命から倭建命へと授けられた「草薙剣」となった)
- ⑧天孫降臨(邇邇藝命、三種神器:八咫鏡、天叢雲剣、八坂瓊曲玉)を持ち高千穂の峰に降臨。天照大神は皇孫に三種神器の玉と鏡と剣とともに、神鏡に関する神勅を授けられる
これは記・紀神話の中核をなす思想といわれている
- ⑨海の国訪問(邇邇藝命、木花之佐久夜毘売と結婚→三神を生む。海幸彦、山幸彦の釣針喪失譚(つりばりそうしつたん):インドネシア地域にも語られている神話)
- ⑩神武天皇誕生(紀元前660年)に繋がる(→720日本書紀)

補足4-25 古事記伝(本居宣長)



出典:出雲歴史博物館所蔵
平成24年5月17日撮影

古事記に出てくる「天之日矛」「新羅の王子」とは何か? 兵庫県史第一巻(抜粋引用)
「矛や剣を祭る宗教、または矛や剣を神とする宗教を奉ずる集団が、とくに新羅から渡来したことが伝記のもとになっていると思われる」
※天之日矛(あめのひぼこ)
新羅系渡来人集団の象徴といわれている

葦原中国(あしはらなかつくに)の
平定 大国主神の国譲り

(口語文訳)

「わが子ども、二柱の神の申し上げたとおりに、われもまた青くまい。この葦原の中つ国は、お言葉のとおりにごことく天つ神に奉ることになっていた。ただ、わが住処(すみか)だけは、天つ神の御子が、代々に日継ぎし、お住いになる。ひときわ高くそびえて日に輝く天の大殿のごとくに、土の底なる磐根(いわね)に届くまで宮柱をしっかりと頼り据え、高天の原にも届くほどに高々と氷木(ひぎ)を立てて治めたまえば、われは、百(もも)には満たない八十の隅の、その一つの隅に籠もり籠まっておりますぞ。また、わが子ども、百八十(ももやそ)にもあまる神たちは、ヤヘコシロヌシが神がみの先立ちとなってお仕えすれば、青く神などだれも出ますまい。」

「服属するのと引き換えに、壮大な宮殿の主として大国主(オホクニヌシ)は鎮座することになった」神話

補足4-26 出雲歴史博物館所蔵

銅鐸と古事記に出てくる宮柱遺跡



「魏志」倭人伝に出てくる百個のうちの1個が出雲から出土(実物写真)



出雲大社大本殿を支えた9本の御柱の1本。真中の御柱(樹齢195年松直径1.3mを3本金輪で束ねた。推定高48m。鎌倉時代作)

雲一、和二、京三(本殿高さ順位)
平成24年5月17日撮影

補足4-27 古事記神話

天手力男神(あめのたじからおのおおかみ)像



北九州市若松区 戸明神社 H23.10.27撮影

補足4-28 三種神器

- ① 八咫鏡(やたのかがみ)
- ② 坂瓊曲玉(さかにのまがたま)

古事記神話の中で、天照大御神の弟、須佐之男命(すきのおのみこと)の度重なる悪戯に対して、天石屋戸(あめのいわと)にお隠れになった際、外へ出て頂くために用いられたもの。神々は知恵を絞り、楽しい祭りを行うことで、大御神が天石屋戸から外を覗かれた時、手力男命(たじからおのみこと)が岩を取り除き、手を引いて出てこられたことで、光が満ちた平和な社会が蘇ったという神話

- ③ 天叢雲剣(あめのむらくものつぎ)

須佐之男命は天上から追放され、出雲国に天降り、そこで八岐大蛇(やまたのおろち)を退治し、大蛇の尾を割くと剣が現れたものを天照大御神に献上。新しい国づくりのため天孫・彦能邇邇彦命(ほのにぎのみこと)が天孫降臨の際に授けられ、初代神武天皇から歴代の天皇に継承されたとされている

- 第10代崇神天皇のとき、御鏡と剣の分身(複製)造

御鏡の分身は、宮中賢所で祀られている。剣の分身と曲玉は、剣置(けんじ)と称され皇位継承の証とされて、今に至っている。御鏡は伊勢神宮、剣は熱田神宮に祀る

- 昭和64年1月7日、昭和天皇崩御

宮中・宮殿松の間で「剣置等承継の儀」、賢所で「賢所の儀」、皇霊殿神殿で「奉告の儀」第125代今上天(きんじょう)陛下、古事記神話以来の伝統継承



補足4-29 伊勢神宮式年遷宮

○20年に一度の大祭。御正殿をはじめ御垣内のお建物全てを新造、神々の御装束や神宝を新調して神儀(ご神体)を新宮へお遷すお祭
総事業費約550億円

○古伝では、天武天皇の御宿願によって、第1回の遷宮は持統天皇4年(690)に行われ、以後、戦国時代に中断する試練に耐えて、1,300余年間にわたって古儀を守り伝えてきた

○第62回神宮式年遷宮は平成17年の山口祭に始まり、30余りの祭儀を経て平成25年秋にはクライマックスの遷御を迎える

○20年に一度の理由は、生きる智慧や伝統技術を世代間に伝承するもの



宇治橋



内宮



外宮

補足4-30 陰陽五行説・干支

十干(じっかん)

甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸
(こう) (おつ) (へい) (てい) (ぼ) (き) (こう) (しん) (じん) (き)

十二支(じゅうにし)

子 牛 虎 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥
ね うし とら う たつ み うま ひつじ さる とり いぬ い

○古代中国の「陰陽五行説」では、万物は「木 火 土 金 水」の五つの気からなり、その消長盛衰によって諸現象が起こるとされた

○さらに、この「五気」に陽(兄・え)と、陰(弟・と)を附し、もともと日の順を表す符号であった甲(1日目)、乙(2日目)・・を組み合わせることで暦(年月日)を表している。60年周期で循環しており、歴代元号が変わっても西暦年が変わらないため古代より元号年の次に付されてきた

例:弘仁三壬辰年(812)

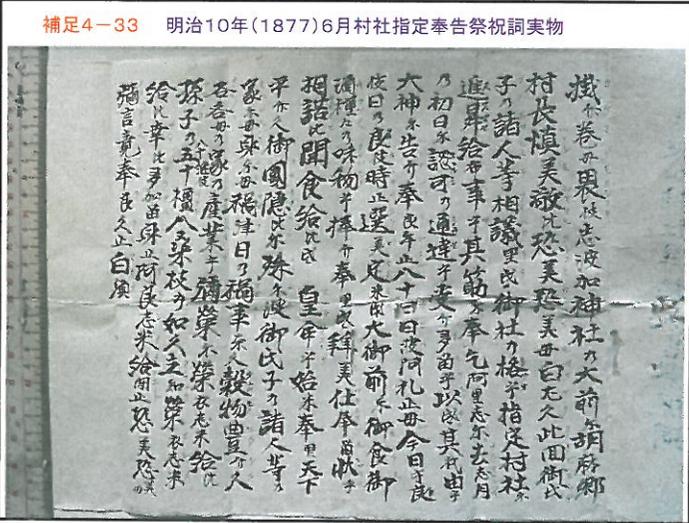
木の兄: 甲(きのえ)	木の弟: 乙(きのと)
火の兄: 丙(ひのえ)	火の弟: 丁(ひのと)
土の兄: 戊(つちのえ)	土の弟: 己(つちのと)
金の兄: 庚(かのえ)	金の弟: 辛(かのと)
水の兄: 壬(みづのえ)	水の弟: 癸(みづのと)

補足4-31 陰陽(おんみょう)五行説・干支(かんし・えと)

十干と十二支の60組で年月日時刻方位などを表すもの

木		火		土		金		水	
兄	弟	兄	弟	兄	弟	兄	弟	兄	弟
乙卯	甲辰	丁未	丙申	戊戌	丁酉	庚子	己丑	壬寅	辛卯
甲子 ¹⁹⁶⁴	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰	己巳	庚午	辛未	壬申 ¹⁹⁹²	癸酉 ¹⁹⁹³
甲戌 ¹⁹⁹⁴	乙亥	丙子	丁丑	戊寅	己卯	庚辰	辛巳	壬午 ²⁰⁰²	癸未 ²⁰⁰³
甲申 ²⁰⁰⁴	乙酉 ²⁰⁰⁵	丙戌 ²⁰⁰⁶	丁亥 ²⁰⁰⁷	戊子 ²⁰⁰⁸	己丑 ²⁰⁰⁹	庚寅 ²⁰¹⁰	辛卯 ²⁰¹¹	壬辰²⁰¹²	癸巳 ²⁰¹³
甲午 ²⁰¹⁴	乙未	丙申	丁酉	戊戌	己亥	庚子	辛丑	壬寅 ²⁰²²	癸卯 ²⁰²³
甲辰 ²⁰²⁴	乙巳	丙午	丁未	戊申	己酉	庚戌 ²⁰³¹	辛亥 ²⁰³²	壬子 ²⁰³²	癸丑 ²⁰³³
甲寅 ²⁰³⁴	乙卯	丙辰	丁巳	戊午	己未	庚申²⁰³⁴	辛酉 ²⁰³⁴	壬戌 ²⁰⁴²	癸亥 ²⁰⁴³

- 補足4-32 日常の神社祭礼**
- 次第
- 手水(てみず)・・・心身を清める
 - 一、修祓(しゅばつ)・・・祓詞(はらえし)奏上
 - 一、官司一拝(くわういちぱい)・・・全員
 - 一、御扉開(みとびらびらき)
 - 一、献饌(けんせん)
 - 一、祝詞奏上(のりとぎことば)・・・
 - ※雅楽(ががく)
 - 一、玉串奉奠(たまぐしほうてん)・・・二拝二拍一拝
 - 一、撤饌(ていせん)
 - 一、御扉閉(みとびらしまい)
 - 一、官司一拝(くわういちぱい)・・・全員
 - 一、直金(なおらえ)



- むすび**
- 近年、「共生」という言葉が流行している。仏教界では「ともいき」、神道では「ともみ」ともいわれている
 本年は陰陽五行説で60年周期(干支)の壬辰(みずのえたつ)の「物事が開ける年」「創生の年」に当たる。女偏を付けると「妊娠」すなわち、おめでたの年ともいわれている
 - 昨今、パワー・スポットとして神社が注目されており、精神面での「心のよいところ」、伝統文化の継承、安泰が求められている
 - 皆様方の益々のご活躍、ご健勝を祈念申し上げます
- ～ご清聴まことにありがとうございました～

参考文献・資料

- | | |
|----------------------------|------------------|
| ①教養日本史(青々企画)田中卓著 | ⑳ネット検索 |
| ②詳説世界史(山川出版)村川堅太郎著 | 大化の改新 |
| ③遣唐使全航海(草思社)上田雄著 | 壬申の乱 |
| ④京都いのちの水(京都新聞社) | 白村江の敗戦 |
| ⑤恒久の都平安京(吉川弘文館)鈴木久男著 | 天之日矛(あめのひぼこ:古事記) |
| ⑥平安京の生活と文学(筑摩書房)池田亀鑑著 | 於美阿志(おみあし)神社 |
| ⑦古代史の舞台裏(青春出版社) | 継体、桓武、大伴金村、武寧王 |
| ⑧古学と古代史の間(筑摩書房)白石太一郎著 | 大山祇神社(今治市大三島町) |
| ⑨朝鮮の歴史(KKベストセラーズ)井野誠一著 | |
| ⑩読むだけですっきり分かる日本史(宝島社)後藤武士著 | |
| ⑪京都市水書誌(京都市) | |
| ⑫日吉町誌(京都府日吉町) | |
| ⑬川船(亀岡文化会館) | |
| ⑭出雲抹殺の謎(PHP文庫)関裕一著 | |
| ⑮出雲歴史博物館資料 | |
| ⑯神道のちから(関学研パブリッシング)田中恒清著 | |
| ⑰八軒家の今昔(大阪・天満橋永田屋昆布本店)パンフ | |
| ⑱飛鳥資料館・高松塚古墳資料館・保津川遊船組合パンフ | |
| ⑲水道産業新聞、毎日・朝日・京都各新聞ほか | |